

主 な 未 侵 入 病 害 の 解 説

学名：*Tomato apical stunt viroid*

本ウイロイド (TASVd) は、1987 年にコートジボワールの栽培トマトで初めて報告され、2002 年にはイスラエルの施設栽培トマトに大きな被害を与えた。現在では多くの国で重要視されている。

分布 コートジボワール、セネガル、フィンランド、イスラエル、チュニジア、インドネシア等。フィンランドでは、現在根絶防除が行われている。

宿主 トマトや、観葉植物である *Solanum jasminoides* (ツルハナナス)、*S. pseudocapsicum* (フユサンゴ)、*Streptosolen jamesonii* (マーマレードノキ)、*Cestrum* spp. 等多くのナス科植物に自然感染し、人工接種では *Nicotiana benthamiana*、*N. sylvestris*、タバコ及びジャガイモへの感染報告がある。



TASVd による株全体のわい化(トマト)

病徴及び被害 トマトでは全身感染し、頂芽の

伸長が停止し植物体のわい化を引き起こす。葉は奇形になり、退緑及びえそ症状が見られる。果実では果肉及び種子の成熟が阻害され、商品価値が損なわれる。また上記の観葉植物では、無病徴感染することが知られている。



TASVd によるトマト葉の奇形

分類・系統 本ウイロイドは、我が国でもトマトで発生が確認されたトマト退緑萎縮ウイロイド (*Tomato chlorotic dwarf viroid*) や *Potato spindletuber viroid* と同じポスピウイロイド (*Pospiviroid*) 属に分類される (本誌 90 号)。本ウイロイドはいくつかの系統が報告されており、タイプ系統の Ivory Coast strain、トマトに激しい病徴を起こす Indonesian strain 及びフユサンゴから分離された S 系統等が知られている。

検出・診断 RT-PCR 法などの遺伝子診断が有効であり、TASVd を特異的に検出するプライマーセットが報告されている。

伝搬 本ウイロイドは、機械的接触及び接ぎ木により伝染する他、マルハナバチの受粉活動で伝染する。またトマトでは種子の内部にまで侵入し、高率 (約 80%) に種子伝染することが報告されている。

防除 トマトでは高率に種子伝染することから、健全種子を使用することが最善である。しかし、一度発生した場合には、感染植物の早期除去や使用器具類の消毒が重要である。